

「お雇い」英国人鉄道技師の経歴調査による技能形成と 赴任の動機の解明

The Careers of the British Railway Engineers Who Came to Meiji Japan;
an Inquiry into Their Engineering Skill and Motivation.

林田 治男 (HAYASHIDA Haruo)

明治初期、鉄道建設のために来日した外国人は 200 名余にのぼり、他の省や事業に比べて最もその数が格段に多かった。鉄道が未経験の事業であり、その規模の大きさを示している。うち技師が 26 名来日し、建設、運行、監理に携わった。ここで、技師とは英国土木学会、機械学会加入者を指す。なお初代在英顧問技師ウィリアム・ポールは、草創期に重要な役割を演じたが来日経験はない。

彼らは例外なく、優秀であり、誠実であった。その理由や背景を知るべく、彼らの技能形成過程を克明に調査し、日本における功績を確認し、来日の動機を探るのが、本研究の出発点であり目的であった。来日前の技師としての力量、離日後の実務経験、これらを調べていくことで技師としての観点から、日本の位置付けを探ろうと試みてきた。

彼らは基本的にヴィクトリア期の中産階級の家庭に生まれている。(中産階級の判定基準として一つの地番に一つの家族が住み、住込み女中がおり、世帯主が「郵便住所録」に掲載され、選挙権を有していることが挙げられる。)実務経験を重ねながら(26名のうち大学卒業者は2名、中退者が2名)技師としての力量を身に着け磨いていった。海外で従事した者も多かった。異なった地形・路盤や気候、地震の有無、これらは英国国内で体験するものと大きく異なっていた。海外では技師の数も少なく、必然的に彼らに任される任務は広く・高水準なものになった。元来技能は経験を積み重ねていくことで身に着いていくものなので、彼らはかえって困難な仕事を歓迎した(英国にいては体験できないような仕事に就く)。完遂した仕事が具体的なものとして残り、現地の人たちに感謝され、また生活環境面での不自由さを相殺する給料も魅力的だった。実体験したことを学会で報告するだけでなく、優れた報告として学会で表彰された者の比率も高かった。

以上が 26 名の簡単な全体像である。彼らの優秀さと誠実な人柄が浮かび上がってくる。

他方、初代鉄道技師長:エドモンド・モレルは、鉄道のみならず日本の近代化に大きな役割を果たした。彼は来日直後に、民部兼大蔵少輔:伊藤博文に、「工部省」の設置や「工部大学校」の設立として実現され、明治初期において近代化を推進していく機関として威力を発揮していくことなる重要な建議を行った。技師としてのみならず助言者としての彼の能力は、どこでどのようにして培われたのか。なぜ彼は、当時の日本の状況に即した親身な建議を行ったのか。

26名の技師の調査の過程で、モレルの功績を知るにつれ、私はモレルのことを集中的に調べ、彼の能力と動機を解明したいと希求するようになった。現在はそれを優先して研究に打ち込んでいる。